

磐城節は一拍子

磐城高校第53回卒業生に、岡野原大輔氏がいる。ラグビー部に所属していた。今、AI産業の中核をなす人物である。

以下、yahooのニュース欄からの抜粋

日本を代表するスタートアップ、プリファードネットワークス(PFN、東京・千代田)。トヨタ自動車と対等の立場で提携し、自動運転車の共同開発を進めるなど、人工知能(AI)開発では世界の最前線と渡り合う。強みは異なる分野の専門家の集団であること。その技術力の中核を担う創業メンバーで副社長の岡野原大輔氏(37)は、進学校でありながら運動部や吹奏楽で活躍する生徒も多い福島県立磐城高校(いわき市)に通った。個性を尊重する母校で触れた多様性は、「外からの視点」で業界の常識を破る技術を開発するPFNの原点となっているようだ。

生まれ育ったのは、福島県いわき市の郊外。市内の山の方に住んでいたの、けっこう自然が豊かなところでした。小学生のころは自転車で山や川へ出かけたり、家でゲームをしたり。今の仕事にちょっとつながることといえば、親が持っていたコンピューターで遊んでいました。

最初に夢中になったのは表計算ソフトを使った遊びです。惑星の軌道を計算し、衛星を地球から飛ばしてそれぞれの星を回ってどうやって帰ってこられるかをシミュレーションしました。小学校低学年ぐらいのときですね。高学年のころには父が「やってみよう」と言って、パソコン通信を始めました。その後は父が使う予定だった機器を完全に占拠して、ずっと使っていました。

小学校5年生だったと思いますが、本格的にパソコンが好きそうだとこのことで、両親が誕生日にパソコンと、当時かなり高価だったプログラミング言語のソフトを買ってくれたんです。それを使ってデータ圧縮の新しいアルゴリズムを考えるのにはまってしまって。パソコン通信で知り合った、お互い身元不詳の人たちで競い合って開発しました。自然の法則もそうですが、一見何も規則性がないように見えるところに実は規則性がある、しかもそれを人間が全部教えるのではなく、データだけから規則性を学習する。こんなところが面白いと思いました。

中学でもパソコン通信は続けましたが、学校では陸上部に入って短距離をやりました。卒業後の進路として一時は高専も考えたのですが、部活動も楽しかったので、結局、進学校で部活も盛んな県立磐城高校を選び、ラグビー

部に入りました。

1年目からいい先生にあたって、1年の担任は益子章先生という、確か東北大の化学の修士を出てすぐの方でした。当時、磐城高校は男子校だったので、ご想像通り授業中もみんなワーワー騒いでいてひどいことになっていたのですが、先生も同じようなノリで接してくれて。僕らはひたすら人を笑わせるのが担当みたいなポジションだったので、よくいろんな先生の物まねなんかをしていましたね。進学校なので真面目に授業を聞いている生徒もいますが、話が脱線する先生なんかも多くて面白かったです。

中学ぐらいからそうでしたが、僕は先生から数学の授業は受けなくていい、と言われました。自分で勝手に先に進んでいくので。かなり生徒に裁量を持たせてくれて、みんなが同じように進まなくてもいい、という感じでした。

すごく多様性のある学校だったと思います。ものすごいオタクの集団もいたし、謎のサブカルチャーにはまっている人もいる。おしゃれにはまる人もいるし、勉強が好きな人もいれば部活を一生懸命やっている人も。学校もそれぞれの個性を尊重してかなり寛容で、文武両道を目指している感じがありましたね。

部活は運動系だけでなく文化系も盛んで、吹奏楽部は全国大会に出場していました。その後、プロのミュージシャンになった人もいます。進路もいろいろです。大学で僕みたいに研究をやる人もいれば、芸術系学部や専門学校に行く人もいます。進学せずに就職する人もけっこう多かったです。社会人ラグビーを続けた清野（輝俊）君は、同じラグビー部の同級生です。

みんな仲間意識が強くて、サッカー部や野球部、陸上部など、ほかの部活の試合の応援にも行きました。「よし決勝だ！応援行くぞー！」という感じで。仲が良かった友達とは、今でもたまに会って昔のネタを話していますよ。

将来はコンピューターか数学をやりたいと考え、東京大理科一類へ。入学後は高校時代のラグビーから一転、英語サークルに。大学に入って1年半ぐらいはESSという英語サークルの活動がメインでした。ラグビーを続けることも考えたのですが、全然違うこともやってみたいな、と思って。当時、英語に苦手意識があったのもESSに入った理由のひとつです。

毎週末、ボランティアで外国人向けのガイドをしました。皇居、浅草、明治神宮に行って、その場で見かけた外国人に声をかけて1時間ぐらい案内するんです。知らない人と話すのにそれほど苦手意識はなく、結構楽しかったです。

サークルには英語劇をやる部門もあって、舞台を作るのに肉体労働系の人

が必要だというので、手伝いました。ベニヤ板や棒を買ってきて舞台セットを建てるなど、なかなかない経験ができました。英語劇をやっていた人の中には、卒業後に演劇やテレビ局のプロデューサーになった人もいます。ESSの活動で文系の知り合いがたくさんできて、弁護士や官僚になったり国連に行ったり、いろんな道に進む友人ができたのがよかったですね。

多彩な友人との付き合いを大切にしつつ、自身の中でも1つの物事にこだわらずに、新たなことに挑戦。子供のころからそうなのですが、常に複数の違うことをする方がバランスが取れるようです。中学では陸上部で短距離をやしつつ、家ではパソコン通信で知り合った人たちとデータ圧縮の技術を競い合ったり、論文と一緒に解説したりしていました。高校ではラグビー部が生活の中心でしたが、自分で数学をもっと深掘りするというようなことはやっていましたね。

学生時代からいくつか別の世界を持っていたのは楽しかったし、良かったと思います。こっちの世界でひどいへまをしても、もう一方の世界ではそんなの関係ない。気分転換にもなります。ただ、複数のことを同時並行でやっていると、1つのことを全力で突き詰める人にはその分野ではなかなか勝てない。こういうあきらめは、ある程度あります。だから、自分の価値は全く違うところにあって、1つのことだけをやっている人には見えない視点を持ち、複数分野の技術や知識を掛け合わせて貢献するのが自分のできることだと割り切っています。

常識を覆すものを創り出す原動力は、多様性。磐城高校には本当にいろいろな生徒がいて、一緒にたくさん馬鹿なこともしてきました。様々なコミュニティーの人たちと付き合っ、自分もいろんなことをやってみるのが楽しいので、この学校の環境が僕には合っていたんだと思います。

異なる世界を知るということは、僕らが今やっている事業にもかなり通じる場所があって、ある世界の考えや慣習、歴史はちゃんとわかってないといけない一方で、その世界の常識を打ち壊すような見方は、やっぱり外の人でないとできない場合がある。PFNも、様々な専門性を持つ人たちが集まって初めて作れるようなものを作り出したい、というのが原点にあります。異なったいくつかの視点から見られる多様性は、やはり重視しています。

同じく世界を相手に堂々と活躍している様々な先輩たちがいる磐城高校の未来は、今の生徒達が作っていくのである。そして、新しくここ磐城高校を目指す後輩たちにきちんとバトンを渡して行ってほしい。

積極果敢に最先端を目指し、可能性の無限軌道へ向かう磐城高校であれ。

人類の未来を創れ。磐城高校生！

